

韓 燕麗著

## ナショナル・シネマの彼方にて 中国系移民の映画とナショナルアイデンティティ

ブルース・リーは生前、香港を舞台とした攻夫片（クンフー映画）に一度も出演しなかった。物語の舞台はタイでありイタリヤ、読書の離島、そして戦前の海である。このことは彼が、週刊『学術思想』掲載分

30. 映画を思考していたことを意味している。そもそも彼は映画初出演は、サンフランシスコの中華街で華僑の女性が監督したメロドラマであった。彼は生涯にわたって中国大陸に無関心で、心はつねにディアスポラのさなかにある華人に向けられていた。

映画が特定の国家に帰属するといまだに本気で信じ



A5判・170頁・2300円  
晃洋書房  
978-4-7710-2523-3

境を飛び越えて製作され、配給され消費されてきた。先に述べたブルース・リーの挿話は氷山の一角にすぎない。加えて逆説的なことではあるが、困難な状況にある祖国を出生し、離散のさなかに置かれているがゆえに、民族の団結と国家の威信回復を呼びかけるといったフィルムが、異国で製作されてきた。

本書は、こうした事実を虚心に見つめることから執筆された。本書は、こうした事実を虚心に見つめることから執筆された。

## 従来の香港映画神話を覆す、きわめて興味深い書物

四方田 犬彦

筆された中国語映画論である。中国映画論ではない。対象となるのは、映画製作が開始された1930年代初期から、海外の中国人の制作の分析を通して、香港アイデンティティが比較的安定するにいたった70年代初期までの作品。分析されるのは、日本軍侵略の危機感のうちに香港で撮られる、た、広東語の「国防映画」と試みている。その意や

では、ここに台湾が絡めばどうなるのか。香港にお

# 学術思想

をもった女性研究者の手になるものである。アジアのなかの日本映画という標語のもとに、日本映画の独自性なる神話の解体を問い続けてきた筆者にとっ

が浮かび上がってくる。そこは今、さらに一冊、従来の香港映画神話を覆す、きわめて興味深い書物は、移動劇団を通して民衆をもち、日本における東南アジア映画研究は単なる好事家の感想文の域を越え、20世紀のアジア文化史、社会史、華人史に隣接する知を構成することになるだろう。（よもた・いぬひこ氏）映画評論家

晏妮の『戦時日中映画交渉史』、李英載の『帝国日本』の朝鮮映画』と、この数年間、日本で刊行される映画研究書のなかに、両大戦間の東アジア映画を論じて蒙を啓かれる思いのする著作が増えてきた。いずれもが広い視座と先鋭な方法論

★かん・えんれい氏は関西学院大学准教授・映画学・東アジア映画史専攻。共著書に「入門・現代ハリウッド映画論集」など。